

## 8. hon'yaku. Heidelberger Werkstattberichte zum Übersetzen Japanisch-Deutsch.

1999年創刊、年二回ハイデルベルク大学の日本学研究室より発行。小さいものだが、日本語からの翻訳の水準を上げるため、文学や思想文献を日本語原文・ドイツ語訳文を対照して載せ、それに細かい注釈をつけています。特に翻訳の困難な箇所には翻訳の選択肢を示し、翻訳家の参考になるよう努めています。

了

## ブラジルにおける日本研究について

織田 順子

ブラジルにおける日本研究は欧米に比べてはるかに若く、まだまだ広がる可能性を持った分野であると言えます。

日本研究がブラジルにおいて始まったのは、今年ブラジル社会の中で92年を迎えた日系移民に負うところが多いのですが、現在の研究状況は日系社会の枠組のみにとどまらず、大学、大学付属研究機関の範囲にまで及んでいます。鈴木妙サンパウロ大学日本文化研究所所長の略史によると、日本関係の日本語文献の他にポルトガル語（以下ポ語と省略）文献が初めてブラジルで書かれたのが40年代、さらに日系社会を対象とする研究の進展が50年代に始まり、引き続き初の日本文学作品のポ語翻訳、日ポ語辞書の編纂、サンパウロ大日本語日本文学講座開設を見た60年代—これらを基盤とした日本研究の多様化が70年代から見られるようになったということです<sup>1)</sup>。

'98年の国際交流基金の調査によると、日本研究をブラジルで行なっている人口は約100名、'88年の調査と比べると50%の増加が見られます<sup>2)</sup>。研究者が所属する機関は主に公立大、それも日本語科のある文学部が圧倒的ですが、他の学部の研究者も最近注目されつつあります。

正規の日本語（日本文学）学部講座をもつ大学はサンパウロ大学（以下サ大）、サンパウロ州大、ブラジリア、リオデジャネイロ、リオグランデスルスの連邦大です。この他、学部でなく語学センターで日本語を教えるカンピーナス大、課外講座をもつロンドリーナ州立大なども挙げられます。以上の大学のうち、講座教員を含むか、それを中心とする研究機関として、サ大の日本文化研究所、ブラジリア連邦大のアジア太平洋研究所などがあります。

私の属しておりますサ大日本文化研究所は、'64年に開設された同大文学部日本語日本文学学部講座をサポートするために設立されました。主な事業として、日本からの客員教授招聘、研究指導、教科書編纂、主にポ語で書かれた日本関係論文集の年刊出版（現在19号）に携わる他、ブラジル全国の日本関係（日本語、文学、文化）教師集会を企画し、8回まで主催しました。（ちなみに、9回目からは他大学がもちまわりで主催することとなり、今年は11回目の集会がブラジリア連邦大で開催されます）また、サ大文学部では、'96年にブラジル初の日本語・日本文学・日本文化大学院講座が開設されました。同大研究所は、ラテンアメリカとされる4万冊の蔵書を持ち、現在新しい大学院のニーズに答えるべくデータベースを作成中ですが、予算の問題、人員不足などで情報化の作業はなかなか進まな

いのが現状です。

大学に付属した研究所とは違い、'65年から主にブラジル日本移民を研究してきた Centro de Estudos Nipo-Brasileiros (略名人文研) は、日系社会のもとに開設されました。同研究所は、ブラジル日系移民の社会学、歴史学、人類学的研究を行ない、近年は日本に來ている出稼ぎブラジル日系人のことも研究対象の一部となっているようです。

また、大学でも従来のように文学部と直接関連のない、情報学部に属する、非常に新しい機関として、サンパウロカトリック大の Centro de Estudos Interculturais Brasil-Japão (ブラジル日本文化交流研究センター) が挙げられます。特に身体芸術とも言われる踊り、演劇、パフォーマンスなどの専門家との交流を目指し、'99年に開設されたばかりのセンターです。

次にブラジル日本研究者の専攻分野に関して述べたいと思います。国際交流基金のデータ<sup>2)</sup> を元に調べた結果、一番多い研究分野は日本語(言語学を含む)、次に文学、芸術(半数近くが演劇)、経済(経営学を含む)、教育、歴史、政治学、社会学、地理学の順になります。中でも日本語日本文学が多く研究されているのは、研究者の多くがもともと文学部に所属していることと無関係ではないと思われまゝ。また、経済経営に対する関心は日本の経済成長がみられた70年代から高まっています。さらに、'88年と'98年の調査の比較によりますと、新しい分野として都市計画を含む建築学、教育学、情報学(映画、ビデオ、テレビ、写真、コンピューターグラフィックデザイン、ジャーナリズム、漫画など)が出てきたことが注目されます。また、この10年の間に研究者の入れかわりが目立ち、若手の研究者が多く登場してきたという面を見ても、ブラジルの日本研究は若いと言えるでしょう。

以上挙げました分野の中でも研究者の一番多い日本語研究に関しては、次のように大きく3つに分けられると、鈴木妙は言っています。

1. 日本語の特徴描写(音韻、形態、構文、語彙、意味、ディスコース的側面)
2. 日本語教育のための応用言語学
3. ブラジル日系社会に見られる日本語・ポ語の言語接触

中でも、3. は92年前にはじめて日本移民がブラジルの土を踏んでから形成された日系社会の中の日本語を知るといふ志向で、厳密な日本における日本語というよりも、ブラジルならではの日本語研究であると言えるでしょう。同じように、先述しました出稼ぎ日系人の研究も、ブラジルでは広い意味での日本研究の中に入れられますが、日本側では必ずしもそうは認めていないように思われます。

終わりになりましたが、昨年('99年)サンパウロ市において「ブラジル日本研究」というシンポジウムが開かれ、実に多様な分野の研究者が集まりました。この集まりにおいて強く主張されたのは、日本語または日本文学専攻でない人々にとっての日本語のむずかしさでした。その解決方法の他、国内におけるネットワークや論文データベースの必要性など、情報交換さらに情報化に関する要望も聞かれました。

このように、現在のブラジルにおける日本研究は多様性をもつ、若い、しかしそれにも関わらずより学術的であろうとしている分野であると私は確信いたします。

## 注

- 1) FUNDAÇÃO JAPÃO (1999) *Simpósio Estudos Japoneses no Brasil- Anais*. (シンポジウム ブラジルの日本研究—報告) São Paulo.
- 2) FUNDAÇÃO JAPÃO (1998) *Estudos Japoneses no Brasil Pesquisa 9*. (ブラジルの日本研究—調査9) São Paulo.

## 台湾における日本語教育の現状

方 美麗

### 学習動機

今台湾では日本語がブームになっていて、日本語を勉強したい若者がたくさん出てきている。学生に日本語の学習動機について聞いたところで「僕は日本のテレビゲームの説明書がよめるために」とか「私は X japan のヒデが好きだった。彼と文通をしたかったからです」とか「日本の歌が好きだから」などのような理由で日本語を勉強する若者が少なくない。そのほかにも、日本の商社に就職したいとか日本語を知っていれば、将来仕事につきやすいとかという理由である。

十数年前、私が日本に留学した時に比べて、日本語はかなり人気が出てきた。当時、日本語だけではなく、日本留学でさえそれほど流行っていなかった。国内（台湾）の大学での日本語教育機関もわずかの私立大学にしかなかった。ところで、近年日本の電気製品や漫画やドラマや流行雑誌などが台湾に大量に入るようになり、日本製品に書かれた日本語が注目されるようになった。日本人の観光客が多いからであろうか町の看板の文字も日本語で書かれるようになり、日本語の音楽もお祭りみたいに台北の町のあちこちに聞こえてくる位の人気ぶりである。おしまいに日本で潰れたそごうが台北の支店では儲かっていて、それに三越、高島屋などの日本のブランドが台湾で商売繁盛している。その光景は、日本人でも信じられない位のものである。このような状態の中に、つい台湾では「哈日族」（日本の物事の追っかける若者のこと）という現象まで出てきている。

### 教師不足

日本語に興味を持つ人が急増してきたため、台湾の国立大学の日本語学科もたくさん設けられている。その勢いは、私が勤めていた学校（輔仁大学）だけでも年間140名程の学生を受け入れているほどのものである。しかも定員17名の定員スタッフに対して、たった11人でまかなっている。他の私立大学でも年間クラスオーバーするほどの学生を受け入れている。クラスオーバーの語学教育の結果、学習効果がなかなか上がらないのである。たとえば、私が勤めていた大学では（それ以前にすでにこのような状態だったという）作文クラスでは30人程であるが、それ以外の授業はみな70人位の学生がいた。クラスが大きすぎると学生がまとまらないこともある。興味がないのに仕方がなく出席する学生は私語をして、クラスの邪魔をすることも珍しくはない。必要や興味のないものを押し付けられても学習効果は出てこない。

学生数の急増が教師不足につながるが、これには他にもさまざまな問題がある。十数年前の教育シ